

学年	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
1年	・自分の考えや思いを言葉で表現することが難しい。習得している言葉の数自体の少なさや、体験したことと習得した言葉の意味を結び付けて理解する経験がまだ十分ではない。 ・話の内容を正しく聞き取ることが難しいため、基本的な聞く態度の徹底が必要である。 ・助詞「は」「へ」「を」や、促音、拗音を正しく書くことが難しいため、言葉や文章を書く活動を、十分に確保する必要がある。	・基本文型を示して文を書く技能を身に付けさせたり、語彙を増やしたりして、表現力を高める。自分の思いに合う言葉を選択することで、活用できるようにする。 ・話を聞く基本姿勢を示す。正しい姿勢で座り、相手の目を見て、最後まで黙って聞くことを、繰り返し指導する。 ・生活科や図工科等、他教科でも文章を書く活動を増やし、表記の仕方を実践から身に付けさせる。推敲の習慣も付けさせる。	・各教科や日常生活で感じたこと、考えたこと、できたことなどを振り返る機会を設ける。振り返ったことを書く活動も取り入れる。 ・図書室での指導の際に、様々な分野の本に触れさせ、読書への興味・関心を高めると共に、語彙力を増やす。 ・音読の宿題を毎日出し、家庭と連携して言葉に触れる機会・自ら字を正しく読んで発音する機会を増やす。
2年	指導方法の課題として、「書くこと」において思考ツールや文章の型などの具体的な支援が不足していたこと、「聞くこと」において日ごろの学習の中で事前に聞き取る観点を絞らせる指導が十分でなかったこと、長文への抵抗感を和らげるスモールステップの指導が足りず無回答につながったことが挙げられる。	書くことでは、段落ごとの役割や「一番伝えたいこと」をメモするフレームワークを活用し、構成を意識させる。聞くことでは、「誰が・何を・なぜ」など、聞く目的に応じたチェックポイントを事前に示して聞かせる。長文への抵抗感を減らす手立てとして、設問や文章をスモールステップ化し、「部分的に読み解く成功体験」を重ねさせることで、無回答（諦め）を防ぎ、問題に向き合う粘り強さを育む。	補充指導として、短い文章から段落構成メモを作成する練習や、事前チェック表を用いた傾聴活動を行う。設問をスモールステップ化して成功体験を重ねさせて、無回答を防ぐ。発展指導では、構成シートを活用して自分の考えを論理的に表現させたり、目的に応じて話し手の意図を深く聞き取らせたりすることで、思考力・表現力をより高める。
3年	・学年の1割(各クラス3人から4人)の児童は、黒板に書かれた内容をノートに写し書くことに課題がある。 ・授業場面では、自分の考えを文章で表す時間を毎時間、7分から10分はとるようにしている。 ・文章を書くことに課題が見られる児童が多いため、黒板には、考えを文章で表すためにヒントとなる言葉を材料として書き残している。 ・書けない児童には、例を示したり、事柄の順序を四角内に書き入れるなどの実態に応じた指導している。 ・配当漢字の定着を図るために、漢字小テストの見直し、提出、再テストの実施などを繰り返し行っている。	・「書く」活動の際は、書き方の手本やどのような言葉を選んで書くのかを示すなど、より丁寧な支援を行い、作文への抵抗感を減らしていく。 ・ICTを活用する場面とノートに書き表す場面を使い分け、ICTで何度も下書きができるようにし、ノートやワークシートに書き表せるようにする。 ・語彙を増やすために、新出漢字を使った熟語を集め、普段の学習から意識的に漢字を使う。 ・左記に示した指導方法はできるときとできないときがあるため、継続していく。	・書いた内容を交流する場面を多く設け、他者の考えに触れるようにし、自分との共通点や友達の考えの良さに気付けるようにする。 ・書く活動では、書いた文章を掲示したり、児童の良い内容を教師の評価を取り入れながら全体で紹介したりし、もっと読んでほしいという学びに向かう力を養いたい。 ・ICTを活用して、文章作成のみならず国語の総合力を付けようとする意欲につなげていく。
4年	・文章を書くことに課題が見られるため、自分の思いや考えを書く活動を多く取り入れ、書くことへの抵抗感をなくしていく必要がある。 ・既習漢字と新出漢字をしっかり定着させていく必要がある。	・自分で考えたことをペアで交流し、それを全体へと広げる学習を行う。自分の考えを交流し合うことの楽しさを味わわせるとともに、友達の考えに触れる機会を多く取り入れた活動を行う。そこで気付いたことなどをノートやICT機器を用いて文章を書く活動を行い、それをお互いに交流させることを通してたくさんの文章に触れさせる。 ・語彙を増やせるように新出漢字の学習の際にさまざまな言葉を集めたり、熟語を作ったりさせる。	・国語科だけでなく、算数科や体育科での振り返りなど各教科でも自分の考えや思いを「書く」活動を増やし、書くことに慣れさせる。 ・漢字と音読の学習に毎日取り組ませる。家庭学習とも連携させ、言葉の活動を充実させる。

5年	・話し合いの内容を聞き取ることに課題がみられるので、要点を捉えながら聞く力を高める指導を行う。 ・文章を書くことに課題がみられるので、文章の書き方を丁寧に指導する。自分の考えをもち、その考えと事実や根拠を取り入れて文章を書くなど、文章の構成や自分の意見を文に表す活動を取り入れていく必要がある。 ・「言葉の学習」の修飾語に関する理解の不足がみられるので、意識させながら書く活動につなげていく。	・日常的に「聞く」ことを重視した指導を行う。ペアやグループでの交流活動を多く取り入れ、話し手の言いたいことの中心を的確に捉えられるようにさせていく。 ・自分の考えをノートにまとめたり、言語化したりできる活動を意図的に取り入れ、それに対する評価や交流を通して、自分の文章を振り返ることができるようにする。	・国語の学習だけでなく、他教科でも文章をまとめたり、構成を考えながら書いたりする活動を増やす。 ・自分の考えをもつことができるように交流活動を多く取り入れ、意見や思いを表出できるようにしていく。 ・児童自身が学習をすすんで取り組むことができるように必要感を感じることでできるような授業展開をしていく。
6年	・知識・技能は概ね定着しているが、目的や相手に応じて考えを整理し、表現する力に課題が見られる。 ・話し手の意図や状況を踏まえて内容を捉える力の育成が必要である。	・話し手の目的や意図を意識して聞き、要点を整理する活動を指導する。 ・相手や目的を明確にした文章を書く活動を指導する。 ・敬語を実際の場面で適切に使う活動を指導する。	・敬語の使い方を繰り返し確認し、定着を図るよう指導する。 ・目的や相手を意識した文章を書く機会を継続的に設定し、表現力を高めるよう指導する。 ・聞き取った内容を整理し、自分の考えを加えて伝える活動を取り入れ、聞く力と表現する力を伸ばすよう指導する。

〔様式3〕

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案（社 会）

東京都北区立王子小学校

学年	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
3年	・地図から実際の場所をイメージすることに課題がある。 ・問題解決学習を実践していく。 ・町探検やスーパーマーケット見学、消防署見学などの体験学習を計画している。体験を通して、児童の関心・意欲を高めているが、より充実した学習にするために事前・事後学習の充実と時間数を確保することが課題である。	・既習事項の4方位や8方位を普段の授業場面でも活用していく。目印になる建物を中心に他の建物がある位置やそれはどの方位にあるのか、といった活動をしていく。 ・普段から問いをもつ→予想する→調べる→まとめるの問題解決学習を1時間で実践できるようにしていく。 ・校外学習の前に、問の予想を立て、見る視点を明らかにする。見学後は、予想と比較し、工夫を全体で共有し、学びを確かなものにしていく。	・方角や地図記号など、地図を読み取るのに必要な基本的な知識を繰り返し学習させ、定着を図る。 ・調べたことや考えたことを国語の単元と関連付けてまとめるなど、他教科と横断的な学習を計画していく。
4年	・日々の児童の様子から図表の読解に課題がある。 ・問題解決のために、児童が資料から情報を収集する場面で、教科書の情報を十分に読み取れないまま、インターネット上にある情報を収集している場面もみられる。	・グラフを読む際には、表題、グラフの軸、単位、1メモリの大きさ、など読むべき順番があることなど、図表の読解方法に関する指導を充実させていく。 ・提示する資料を精選し、情報を収集した上でのインターネット活用などの個に応じた指導設計をしていく。	・算数科「データの活用」領域など、教科を横断して、図表の読解に関する技能を指導していく。 ・インターネット上にある情報の不確かさや、引用に関する指導など、インターネットを活用する上での情報活用能力も併せて指導していく。
5年	・用語の理解の定着が不十分である。 ・資料の読み取りはできるが、そこから自分の考えを導き出すことが難しい。 ・必要な情報を的確に収集し、分かりやすくまとめていくことが課題である。	・教科書やインターネットを活用し、全員が同じ調べ学習を行うだけではなく、児童一人一人がそれぞれ問いをもって調べ学習をすることで学びの本質につなげていく。 ・交流活動で自分の考えに他者の考えを取り入れながら、社会的事象の意味を考える活動を展開する。	・教師が一方向的に与えた資料から児童が読み取るだけでなく、児童が自分の能力や興味・関心をもった資料を選択できるようにしていく。 ・ゲストティーチャーを活用し、興味・関心を更に高める。本物に触れる経験を重視し理解につなげていく。
6年	・資料を読み取り、事実を確認する点や読み取りから正しい判断することに課題が見られる。 ・複数の資料を結び付けて、自分の考えを出すことが難しい児童が多い。 ・地理的分野の用語の意味を理解していないことが多い。	・教科書の資料と本文を結び付けるようにさせることで、それぞれの資料からどのようなことが分かったかを、視覚的に明らかにする。 ・用語が出てきた際は、全体で一緒に確認して理解を深める。	・学習で学んだことを自分たちの生活に生かせるように、他教科との関連(算数科のデータや資料の読み取りなど)を意識しながらカリキュラムをつくっていく。 ・自主学習などで社会科で学んだ学習についても調べる機会を設ける。 ・資料の読み取り方や考え方を学ぶ場面を増やす。

〔様式3〕

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案（算 数）

東京都北区立王子小学校

学年	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
1年	・問題場面を式に表すことに課題が見られる。数量の関係を半具体物を操作したり、図に表したりする活動を充実させる必要がある。 ・数をまとまりとして捉えることが難しく、数え間違いが見られる。まとまりを意識して数え、図に表せるようにする必要がある。 ・計算技能の定着には、個人差が大きい。	・問題場面に沿ってブロックを操作し、加法・減法の場面を捉えられるようにする。 ・答えだけでなく、図や言葉を用いて考え方を説明する活動を増やす。 ・計算カードや具体物の操作を活用し、数の感覚や量感を育てながら、計算技能の習熟を図る。	・答えだけでなく、複数の考え方を図や言葉で説明し合い、互いの考えのよさを見付ける活動を通して、思考力・表現力を伸ばす。 ・基礎計算の習熟を図るために、きたコンのドリルや計算カードを活用する。 ・他教科や、身近な日常活動の中にも数的要素を盛り込み、数に対する興味・関心や量感を高める。
2年	指導方法の課題として、「集合数」や「立体の面」など基礎概念を具体物で感覚的に理解させる視覚的、操作的活動が不足していたこと、加減混合など複数段階の計算において、順序立てて解き進めるプロセスの指導が十分でなかったこと、文章題から必要な情報を整理・抽出させるための活用指導が足りなかったことが挙げられる。	ブロックの操作や立体の型取りなど具現的な活動を取り入れ、数覚や空間認識を感覚的に定着させること、加減混合の場面で計算順序を示す構造化シートを活用し、順序立てて解くプロセスを定着させること、問題文に線を引いたりテープ図に表したりする活動を通して、必要な情報を整理・抽出する読解力を育む。	補充指導では、ブロック操作や立体型取り、計算順序を示すシートを活用し、基礎概念や解法プロセスの確実な定着を図る。問題文の条件を線引きやテープ図で整理させ、スモールステップで着実に解く力を育む。発展指導では、具体物から抽象的な図や式への変換を促し、複数の情報を含む複雑な文章題や図形問題に挑戦させることで、自力で思考・判断し表現する応用力を高める。
3年	・問題解決学習を実践する時間を十分にもって学習に取り組むこと。 ・「長さ、かさ」の内容の基礎的な理解の定着が必要である。 ・少人数指導を生かして、「知識・技能」を定着させられるように時間を確保することや丁寧な支援をしていく必要がある。 ・最後の問題で13%の児童が無解答であることから、時間内に解けていないことが考えられる。問題を速く読み解く力や、時間を意識して問題に取り組む力を付ける指導が必要である。	・具体物を取り入れることで、児童に問題場面をイメージしやすくさせる。また、体験的な活動を行い、量感を育てていく。 ・基礎的な計算力を高めるため、適用問題、きたコンのドリル等で反復練習させる。 ・図、式、数直線等を用いて問題を解決している児童のノートを紹介し、多様な解決方法があることを示していく。	・早くできる児童には、教科書の補充問題やきたコンのドリル等に取り組みさせる。つまずきのある児童には、基礎的な問題をしっかり理解できるよう丁寧な個別指導を行う。 ・自分の考えを友達に説明する時間を設け、算数的な思考力・表現力を育てていく。
4年	校内正答率は、目標値、前年度の校内平均正答率、区の平均正答率、全国平均正答率のいずれも上回っており、学習内容はおおむね定着している。一方、日常の学習では、答えを求めることはできても、その理由や考え方を説明することに課題が見られる。考えの根拠をノートに書いたり、言葉で説明したりする指導を充実させる必要がある。	・計算を解く、長さを測る、重さを量るだけでなく、解の予測、大きさ・量感の予測を立てさせる学習をしていく。 ・自分の考えだけでなく友達の考えを説明する学習の場を設ける。	解答を導き出した過程も考えさせることで、ケアレスミスを減らし、応用問題の正答率を上げていく。加減乗除の反復学習により基礎・基本の定着を図る。
5年	平行四辺形の作図技能の定着に課題が見られる。分度器やコンパスの基本的な使い方とともに、辺の長さや角の大きさなどの条件に基づいて作図する手順を、丁寧に指導する必要がある。	・教科書の作図問題に確実に取り組みせ、完成した図だけでなく、用具の使い方や作図の手順が正しいかを教師が個別に確認する。 ・作図の手順や用具を使う際のポイントを、言葉や図で整理させる。	作図が苦手な児童に対して、分度器やコンパスの使い方を一つずつ確認し、手順カード等を活用しながら個別に支援する。また、ペアで作図の手順や注意点を説明し合い、教師が正確に作図できているかを確認する。
6年	「単位量あたりの大きさ」「円グラフ・帯グラフ」の問題で、校内正答率が全国正答率を下回っていたり、近かったりしている。式を立てて自分が求めている答えやグラフの数値の意味を考えさせる指導が必要である。	・習熟度が低いクラスは、式や答えの意味を丁寧に考えさせるような授業を行い、高いクラスは発展的な学習を通して、力を高められる授業を行う。 ・高いコースの児童が低い児童のコースとの学び合いができる機会を多く設定する。	・ICT機器を活用し、補充学習を行う。 ・中学校進学を見据えて、長期休業期間や6年の総まとめの学習では、児童それぞれが自分の苦手な内容を分かった上で学習に取り組ませる。

〔様式3〕

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案（理 科）

東京都北区立王子小学校

学年	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
3年	・観察学習では、事象を丁寧に観察し、時間の経過にともなう成長の変化を細かく観察してきている。しかし、事象と事象の共通点や差異点を科学的な見方・考え方を用いて指導しているが定着することに時間が必要である。 ・実験学習では、実験方法を考えたり、結果から考察したりする経験がほとんど無いため、理科の学習の仕方を身に付けるよう、指導していく必要がある。	・問題→予想→計画→観察・実験→結果→考察→結論の授業の流れを明確にし、基礎を定着させる。 ・児童が問題を見付ける場面では、不思議・なぜと思うことができるように、差異点や共通点を見出せる事象を提示する。	・定着を図るために単元の最後にプリントや教科書の問題に取り組ませ、理解を深めさせる。 ・NHK for Schoolなどの視聴覚教材を有効に活用し、興味関心を高めさせる。
4年	虫眼鏡の使い方や棒温度計の読み方が問われる問題に課題が見られた。授業で実験器具を実際に使うときに、先生や友達に頼らず、一人ひとりが確実に技能を身に付けられるような指導を心がける必要がある。	植物等を観察するときには、一人に一つ虫眼鏡を配布する等、全員が必ず操作できるように実験器具を充実させる。また、棒温度計のように全員分が確保できない場合は、グループで一人ひとり温度を読み、お互いにチェックし合うなどの工夫をする。	虫眼鏡の使い方や棒温度計の読み方など実験器具の使い方については、1年に1回経験しただけでは、正しい知識・技能の定着が難しい。他単元でも使用できる機会を確保したり、小テストやデジタルドリルを利用して復習の機会を設ける。
5年	・自然の事物・現象から問題を見出すことや疑問を抱くことが課題である。 ・予想や仮説を基に、解決方法を考え、実験に取り組めるようにする。 ・実験を実験したままにせず、考察や既習内容とつなげていくことが必要である。 ・理科的な用語を正しく理解できるようにする。 ・新しく学んだ内容と身近な生活をつなげていくことで、抽象的な概念ではなく、具体的な実感を抱けるようにする。	・児童の生活体験から問題を見出すことや、生活を振り返り、新たな視点をもつことで課題意識をもてるようにする。 ・実験→結果→考察の流れを大切にし、予想に対する考察を考えさせるようにする。 ・実験では、予想を基に取り組ませる。	・ICT機器やデジタル教材を活用することで、実験の検証を行い、知識の定着を図る。
6年	・問題→予想→実験→考察→結論といった問題解決型学習の考え方を定着させることに課題がある。 ・実験を実験したままですら終わらず、準備段階からしっかり計画や実践をするようにする。準備を児童自身に行わせる。 ・実験のまとめ、考察をしっかりと行い、授業で取り組む実験だけでなく、学習したことを生かした実験に取り組むなど、発展的な学習を行う。	・児童が問題を見付ける場面では、児童の生活経験や知識とのズレを狙って事象を見せることを意識する。 ・実験を行う際は、必ず全員が予想をもっている状態で臨むようにする。 ・考察では、問題や予想に一度立ち返って、何を予想したのか、何を調べるために実験をしたのか、結果では何が見えたかななどを丁寧に全体で整理する。	・ICT機器を活用して、実験の様子を記録させることで、事象を見逃した児童や、忘れてしまった児童が何度も見たり聞いたりできるようにする。